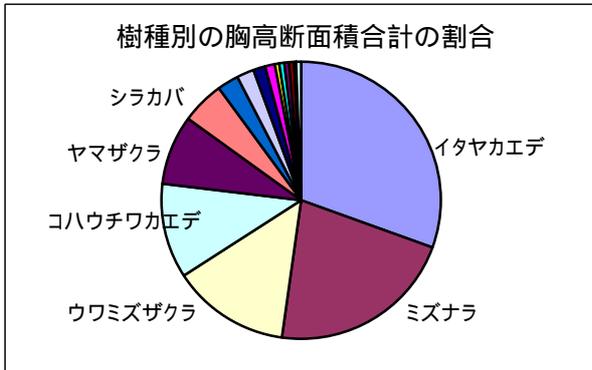


フィールドスタディから

ミズナラ林部分の「毎木調査」より 2003年7月13日

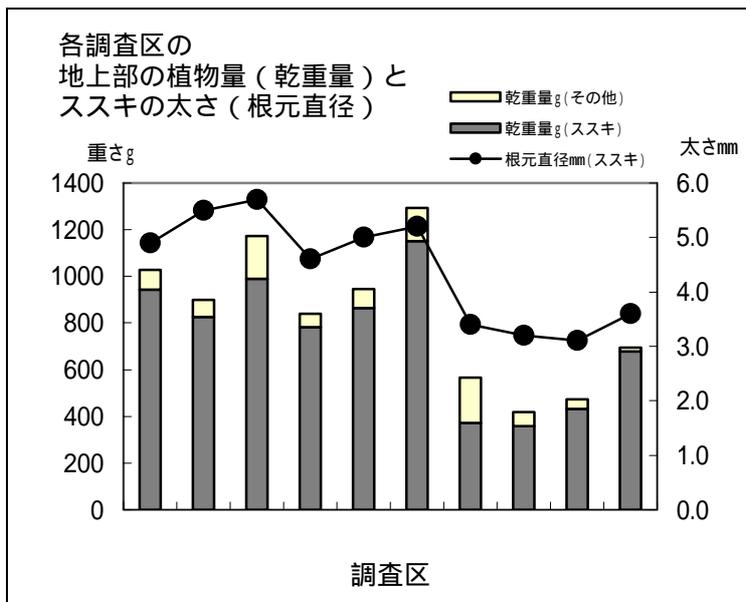
どんな「ミズナラ林」なのかを知るために、林の中に10m×10mの区画を3つ作り、それぞれで「毎木調査」を行いました。



地面から1.3mの高さ(胸高)のところで測った直径から幹の断面積を計算し、樹種ごとの合計を出しました。「イタヤカエデ(アカイタヤ)が目立つミズナラ林」と言えそうです。調査区の中に高さ1mほどのブナがありました。ブナとセットで出てくることが多いオオバクロモジという低木もあります。この場所は放置すればやがて、ブナ林へと変化していくことが考えられます。

ススキ草原部分の「バイオマス調査」より 2003年10月19日

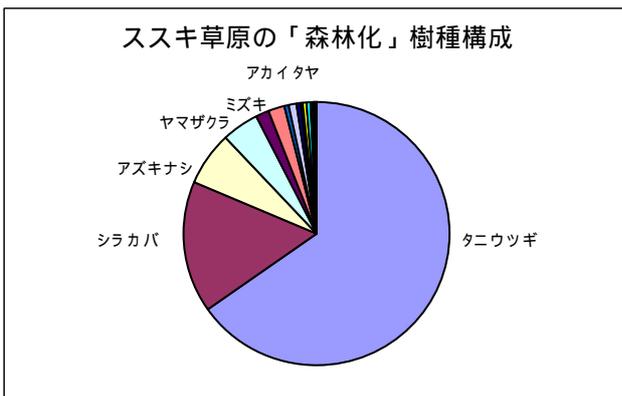
1m×1mの区画10カ所で、「植生調査」と「バイオマス量調査」をおこないました。



調査区全体で36種類の植物が見られました。ススキ、ヨモギ、トリアシヨウマ、オカトラノオ、スミレ類、ワラビ、カセンソウなどです。全国的に少なくなっているオミナエシも3区画で見られました。ナンバンギセルとともにフィールドの貴重種です。ススキの地上部のバイオマス量(乾重量)は、調査区の平均では1㎡あたり約740gでした。1haあたりに換算すると、毎年7.4トン、草原全体の10haでは74トンの生産量になります。

ススキ草原部分の「森林化調査」より 2004年5月15日

10m×10mの調査区画を斜面上・中・下部に5区画ずつ設定し、ススキ草原に侵入している樹木の「毎木調査」をおこないました。また、森林化の歴史をさぐるために一部を伐採し、年輪を数えました。



幹の断面積を樹種ごとに集計したところ、低木のタニウツギがススキ草原を広く覆っている様子が、数字の上でも確認できました。なお、斜面上・中・下部それぞれのタニウツギの構成は36%、69%、98%で、斜面下部はタニウツギの低木林となっていました。年輪の最高はシラカバの25年。タニウツギは20年程前からコンスタントにススキ草原へ侵入している様子が推測できました。